

令和4年度 第3回学校運営協議会及びコンプライアンス委員会議事録

R5. 2. 28 (火)

静岡県立沼津聴覚特別支援学校

1 学校運営協議会 (9:30~10:30)

〔参加者〕・運営委員 5 人、本校教職員 11 人、手話通訳者

〔欠席者〕 1 人・・・PTA 副会長

(1) 校長挨拶

・学校運営協議会の制度について確認

⇒ 学校と保護者と地域住民が協働しながら、子供たちの豊かな成長を支えて、地域と共にある学校づくりを進める制度。

・学校運営委員が持つ3つの権限について確認

①学校の運営に関する基本方針の承認

②学校運営に関する意見の申し出

【第1回 学校運営協議会でいただいた御意見について】(取り組みの説明)

意見1 : 障害理解のために、幼児からの交流をもう少し広げたらどうか。

⇒ 金岡保育所との交流は、計画通り、4・5歳児が年間25回実施することができた。

⇒ 居住地交流は、7人が延べ17回、地元の保育園・幼稚園の子供と一緒に過ごすことができた。

意見2 : 中学部の生徒(1人のみ)に集団生活を学ばせたらどうか。

⇒ 交流校である沼津第五中学校の生徒と同じ教室で過ごして、交流会等を行う活動を3回行った。また、文化祭に参加させてもらって、手話歌を披露した。さらに、音楽鑑賞会の交流をしたり、学力調査を五中の集団の中で受ける体験をしたりした。

意見3 : さらに聴覚の活用を図ってほしい。

⇒ 自立活動の時間を中心に、聞き取りを行って、どんな音韻が聞こえにくいのか、聞き誤りが起きやすいのか自分自身で知る学習をしている。

意見4 : 手話をもっと使用してほしい。

⇒ 聴覚口話と日本語対应手話での授業を進めている。

意見5 : 成人のろう者ともっと関わるようにしてほしい。

⇒ デフ柔道の佐藤さんをお招きしての交流会を行った。(小学部)
進路講演会では、成人ろう者で、SONY で働いていた方をお招きして、お話を聞いた。(中高生対象)
卒業生のお母さんにお話をいただいた。一緒に卒業生も来てく

れて、お話を聞くことができた。保護者は、子供の成人後の将来像が具体的にイメージできた。(幼稚部)

⇒ 成人ろう者との関わりの中では、社会に出た時の困難や、それをどのように改善していけばよいのか、どのような資源を活用すればよいのかについても示唆をいただいた。ロジャー等を使った音声でのやり取り、手話通訳の活用、音声認識ソフトを使った文字通訳の活用等、様々な具体的取り組みについても伺うことができた。

意見 6 : 子供たちが主体的に活動できるようにするための具体的な取り組みを知りたい。

⇒ ICT 活用を進めてきた。1 人 1 台の iPad or chromebook が導入されたので、調べ学習をするだけでなく、機器を活用してまとめ、発表することも、小学部から使っている。(子供たちは ICT に対する抵抗感がない。)

意見 7 : 部活動について知りたい。

⇒ 中学部生徒が、中体連卓球個人戦に参加して、健聴者との試合を体験した。関東地区聾学校卓球大会にも参加した。高等部では、陸上部と卓球部がそれぞれ関東大会、全国大会へ参加し、全国で入賞した生徒もいた。美術部では、昨年度作った合同作品が、今年度の最優秀賞の県教育長賞を受賞した。それぞれの得意分野で成果が出たことは自信につながったと考えている。

意見 8 : 地域 (泉町) とのつながりについて、どう取り組むか。

⇒ 災害発生時の協力体制だけではなく、3 年間できなかつた町民祭への協力、本校花壇の整備への協力依頼等を考えている。

③教職員の任用に関する意見の申し出

⇒ 聴覚特別支援学校として、こんな教職員が必要なのではないかという御意見があれば伺いたい。

(2) 令和 4 年度 学校経営 [学校自己評価] について (報告)

①グランドデザインについて・・・資料に沿って説明。

②本年度の取組について

【ア、社会のニーズに応える学校の魅力を発信する】

・学校の強み、魅力について理解し、説明できる教職員・・・95.7%

⇒ 概ね達成できた。

・HP 等で魅力を発信するという点では、毎月更新する・・・71.4%

⇒ B 評価とした。できる限りオンタイムで取り組みを地域に発信することで、学校への理解の深まりにつなげたい。

【イー①聴覚障害教育の専門性の向上を図り、その専門性に基づく効果的な「つなげる学び、広げる学び」による学力向上】

- ・聴覚障害教育の専門性とは何かの見直しを進めてきた。
 - ⇒ 各種専門研修において何らかの講師役を担うことができる。・・・87.8%
得意なことを人に伝えることができるという自信がある教員が増えた。
 - ⇒ 手話力向上に関しては・・・79.6%
もっと学んでいかなければいけない。
- ・新型コロナの影響で、様々な研修が Zoom を使って行われるようになった。
 - ⇒ 対面で行えないのは残念だが、Zoom なら校内で参加できるので、より多くの研修機会に恵まれた。個々が学んだことを校内に広めていくようにしたい。
- ・学年間、教科間のカリキュラム確認・打合せについては、教科の縦のつながりはまだまだ足りない部分があると教員は考えている。
- ・授業が分かりやすいと答える生徒・・・91.7%
 - ⇒ 概ね達成できた。手話を使うだけではなく、様々な視覚的な教材を用意し、板書の工夫、掲示物の工夫等に取り組んでいきたい。

【イー②社会自立に向けた、生活力や社会性を育てる教育の充実】

- ・保護者講座に積極的に取り組んできた。卒業後の子供の姿がイメージできると答える保護者が 95.9% だった。幼稚部では、卒業生の保護者や卒業生に話をしてもらうことで、幼稚部の保護者が我が子に将来こんな姿になってほしいというイメージを持つことができるようになってきている。今後も縦のつながりが見えるということを生かした、社会自立に向けての教育を行っていきたい。

【ウー①自己肯定感を高め、自らの命と健康を守る、人権教育・安全教育を推進する】

- ・中高生になると、心が揺れることがたくさんある。スクールカウンセラーに定期的に来てもらっている。その機会を活用して、生徒が自分の心を伝え、心の安定を図るだけではなく、教員がスクールカウンセラーと話をする中で、生徒への対応に関するアドバイスをしていただくこともあった。また、保護者とスクールカウンセラーがつながりを持つことで、子育てに自信を持って前向きに進んでいけると考えている。

【ウー②防災対策】

- ・年間6回の防災訓練を行いながら、(寄宿舎も含めて) 防災対策を進めてきた。これで万全とまではいかなくとも、常に意識を持って対応するようになってきている。

【ウー③新型コロナ感染防止対策】

- ・感染者はいたが、校内で感染が広がることはなかった。どこで感染するか分からない状況下で、感染が広がらなかったのは、教員の対応やコロナスタッフによる消毒等が丁寧に行われことによると思われる。

【ウー④自己肯定感を高める】

- ・自分や友達の良いところを知っていると答えた児童生徒は、「友達のよさを知っている」と答えた子が 100% だったのに対し、「自分のよさを知っている」

と答えた子は 78.3%だった。もう少し自分を好きになってほしいと思う。教員と話をしてみると、「私にはこんなに良いところがある」と分かるが、改めて問われると、「自分のことはそんなに好きじゃない」と言う子の中にはいる。もっと自分を好きになって、自信を持てるようにしていきたいので、引き続き取り組んでいきたい。

【ウー⑤聴覚障害教育における地域のセンター的役割を積極的に発揮する】

- ・聴覚支援センター、病院、保健福祉部局と連携し、連絡調整しながら進めてきた。通級指導教室での学びが良かったという生徒・保護者・在籍校の教員からの評価があった。これからも積極的に学校の持つ資源を地域の小学校やそこに通う子供たちのために生かしていきたい。0歳からの教育相談、乳幼児教室についても、受けて良かったと答える保護者が100%だった。保護者を支えて、子育てに前向きになってもらえるようにしていくことが、聴覚障害を持つ子供の将来に生きると考えている。学校等支援訪問の希望への対応については、91.3%実施した。日程が合わないこともあり、全てというわけにはいかなかったが、「教えてほしい」「情報が欲しい」ということに対応できたと考えている。

(3) 各学部・寄宿舎の取組と評価

【幼稚部】

- ・学部目標「友達と一緒に楽しく遊べる子を育てる」達成のために、様々なことに興味を持って、主体的に活動できる授業を作っていくこと、夢中になって遊ぶことのできる環境を整えていくことやとりを通して自分の思いや考えを伝えようとする気持ち、相手の話を聞こうとする気持ちを育てていくことを念頭に取組んできた。学部評価では、友達と関わりながら、楽しく遊ぶことができています。学部研修でも扱ってきたように、子供たちの主体的な動きを引き出すことを意識して、教員が実践してきた。遊びを通して、自然なやりとりが成されてきている。教員が介在しながら、子供同士のやりとりを広げていきたいと考えている。
- ・来年度は、今年度の反省を基に、言葉だけでなく、表情や身振り、手話単語、音声などによる様々な子供の発信を教員が受け止めて、子供に分かるように返すという「コミュニケーションの充実」を図りたい。一人一人の育ちに応じた支援を考えていきたい。
- ・今年度、指定園交流、居住地園交流を久しぶりに実施することができた。同年齢の子供たち、地域に暮らしている子供たちとの触れ合いは大事だと考えているので、方法や内容の充実を図りたい。
- ・保護者の付き添いは、義務ではないが、毎日子供の様子を見に来てくれているので、教員と子供とのコミュニケーションの仕方を見てもらうことで、親子のコミュニケーション活動を支えていきたい。

【小学部】

- ・今年度は、児童が5人増え、11人となった。休み時間の様子を見ていると、子供同士の関わりが増えて、お互いを認め合える場面が多くなってきた。毎日、元気で楽しく、学ぶことが楽しいと思われ続ける小学部でありたい。
- ・コロナ過だが、感染予防等、「自分の身を守る」という意識が高まっており、「他者への思いやり」の気持ちも持てるようになってきている。
- ・分からない言葉、ニュース（国内外）への興味・関心が高まっている。
- ・社会自立に向けて、キャリアパスポートを活用している。友達の良さだけでなく、自分の良さを知り、自他を大切にしながら中学部・高等部に進んでいってほしい。

【中学部】

- ・今年度は、生徒1人だった。1人1教室で、個に応じた指導を行ったことが、成果につながった。反面、他の生徒との関わりが少なくなることが課題になっていたが、高等部との連携を図り、一緒に学習できる機会を設けた。
- ・生徒（3年生）は、2年間、新型コロナの流行で交流ができなかったが、今年度は交流を実施することができた。交流籍交流や沼津五中との交流の中で、大人数人の中で活動し、自信を持ってコミュニケーションできた。
- ・3年間、コロナ禍で、『先輩ろう者を招いての懇談会』ができなかったが、今年度は、先輩ろう者の働く姿を見に行くことができた。次年度は、そういう機会を増やして、自分の将来を考える生徒にしていきたい。
- ・補聴器の購入という機会があり、聴能担当の教員と話すときに、自分の将来の生活を考えて、補聴器を選ぶことができてよかった。

【高等部】

- ・3年生6人の進路は、大学進学が1人、専門学校進学が1人、企業就職が3人、福祉施設が1人で、進路実現100%という強みがある。また、在校生は5人しかいないが、個別指導（手厚い指導）が強みとなっている。
- ・課題は、集団による学びの経験が少ないということ。特にこの3年間は、新型コロナ感染症流行の影響を受けた。今までは、先輩を見て学んできたところもあったが、そういう経験がなかなかできなかった。最近の卒業生を見ると、コミュニケーション面で課題を抱えて、人との関わりに悩んだり、会社を辞めてしまったりしている。そのような課題を自立活動の授業や普段の生活の中で解決しながら、社会自立を意識できるようにしていきたい。委員の御意見にあった「できることを増やしていくことが主体性や自信につながる」ということを意識して指導してきたが、新型コロナによる制限があり、十分でなかった。来年度は、いろいろなことができるようになってくると思うので、主体性や自信につなげられるよう、取り組んでいきたい。

【地域支援部】

- ・今年度は、通級性が在籍している園・学校への訪問を柔軟に行うことができた。通っている病院との情報交換や保健センターとの連携がスムーズに行えるよう

になった。聴覚障害のあるお子さんが通っている学校等からの問い合わせが増えて、それに対応できた。来年度も計画的に実施可能なことを行っていくとともに、突発的な案件にも各所の協力を得ながら対応し、支援していきたい。

【寄宿舍】

- ・コロナ禍で、集団生活の中での思いやりとか、挨拶、社会参加に向けての生活など、通常どおりできないことが多々あった。しかし、寄宿舍生は、大きなけがや病気もなく、元気に生活することができた。来年度は、開かれた寄宿舍として、地域との交流を密にしながらやっていきたい。

(4) 保護者アンケートより（報告）

- ・「あまりそう思わない」という回答が全部の項目にあるのは残念だが、大部分の保護者からは、「そう思う」という回答をいただいている。
- ・キャリア教育については、幼稚部・小学部の保護者からの「高等部卒業後のイメージが浮かばない」という意見に、高等部の保護者の協力を得ながら対応してきた。キャリア教育＝進路指導ではなく、生涯にわたるものとして捉え、取り組んでいきたい。
- ・個別の教育支援計画・指導計画については、「教育支援計画」の記載では、学校ですべきことと家ですべきことが明瞭でなかったかもしれない。改善したい。
- ・文面で示してもらった内容（幼稚部・小学部）については、学部主事が、保護者会・参観会で説明した。
- ・「時間を守る」ということをこれから意識していきたい。

(5) 児童生徒アンケートより（報告）

- ・「自分の良いところを知っている」という子供が少ないのが課題。（「友達の良いところを知っている」は100%になっている）機会をとらえて、教員からその子の良いところを言語化して伝えることで、実感できるようにしたい。
- ・「交流や共同学習が自分にとってプラスになった」という項目については、社会に出ていくためには、「交流活動のこういうところが大事だ」ということを交流に入る前に伝えることが効果的であると考えられる。
- ・コロナ禍3年目で、徐々にできることが増えてきた。その中で、どうすればできるのかを教員が考えた。また、一步踏み込んで、本当にその活動は必要なのかという根本的な問い直しもした。

(6) 運営委員の皆様より

- (委員1) 中学部・高等部など、他校との交流の機会が持っていると感じた。通級生については、自分一人で分からないこともある。普通小学校にいる子に困難があると感じる。学校が地域と交流するのも大事だが、地域の普通学校に通う子と聴覚特別支援学校の交流の機会も持つと良い。
- (委員2) 幼稚部と交流している。計画した回数を実施できたことは良かった。運動会も広いグラウンドを使わせてもらって、3年ぶりにできた。協力して行い、子供たちが達成感を持てた。できる限りのことはやれたと思う。子供たち

交流を楽しみにしていることが嬉しい。来年度もこのような形でできると良い。細かく学校評価ができていないが、解決していない課題を来年度どうするかについて話し合っておくことが大切だと思う。

(委員 3) 居住地での交流も積極的に行っているとのことなので、頑張っていてほしい。地域の子供たちに、「こういう仲間がいる」ということを伝える良い機会だと思う。アンケートの中では、自己肯定感について、「自分が好き」と答えた子の割合が低いということだったが、数字を見てみると、高等部も自己肯定感は比較的高い方だと思う。幼稚部の保護者に対して、進路に関する講話をしたということは、とても大事なこと。普通学校でも、特別支援の対象の児童生徒の保護者が、我が子の将来に対して不安を持っている。幼稚部の保護者も同様であると思う。その不安は、子育ての不安につながってしまうかも知れない。子供たちが将来こういう道に進むことができる、また、学校がそれをお応援してくれるということが分かると、我が子に対する愛情の表し方も、学校に対する信頼感も変わってくる。幼稚部の段階からきちんと伝えていくことが大事。ホームページについては、形式が色々あると思う。自分がやっていたホームページはブログ式で、簡単に入力できるので、毎日更新できるものだった。毎日更新すると保護者も興味を持つ。閲覧数が一日に 200~300 もあった。子供たちの情報を保護者に伝えるという意味で、ホームページの更新のしやすさについても検討みたらどうか。

(委員 4) 聴覚特別支援学校の子供たちのことを考えれば、五小や五中といった普通学校の児童生徒と交流することが非常に大事。運動会を一緒にやっていることなどは、とても良いことだと思う。また、聴覚障害のある子供には、この学校で「学び方」を身に付けることが大事ではないかと思う。気になっていることは、東海地震が来ると言われていたが、50 年が経ち、いまだに発生していないこと。東南海・南海地震が起ころうという話になってきていて、そちらがメインになっている。むしろ、そちらの方が先に発生するのではないか。その時に、聴覚障害のある子供たちをどう救うかを学校として考えていくことが一番重要だと思う。本校や近くの学校（視覚特支、五小、五中、沼津市立高、加藤学園）が東西の連合自治会の避難所になっている。それらの学校と協力してどのようにやっていくか考えていけると良い。

(委員 5) アンケートについて、100%でなくても、90%台なのは素晴らしい。心配なのは、聾学校は一生懸命やっているが、どれだけ世の中に知られているかということ。（ホームページなどもあるが）関心を持って見ている人が少ないのではないかと思う。先輩と後輩の交流はとても良いことなので、続けていてほしい。卒業した後、聾者の協会へも入らない人が多いという現状には不安を覚える。大阪で起きた、聴覚障害のある女の子の死亡事故の裁判で、逸失利益が健聴者の 85%にとどまると大阪地裁が認定したことについて、憤りを感じている。また、静岡県でも、聴覚障害のある女性が、旧優生保護

法の下で不妊手術を強制されたことについて賠償を求めた裁判で、国に損害賠償を求める判決があった。裁判でそういう結果を出したということ、戦えば勝てるのだということ、差別はまだまだあるのだということを知ってほしいし、教員もそういう意識を持ってもらえると良い。

(高等部主事) 権利について話す生徒が少なくなっている。おそらく先輩と交流する生徒も少なくなっていると思われる。卒業後に、聴覚障害者の先輩たちの所へ自分から行けるようにするための指導が必要だと考えている。

(寮務主任) 学校でもいろいろな「仕組み」について学習はするが、なかなか理解がおいっていない。繰り返し指導をしていくつもりだが、難しいところもある。以前の聴覚障害児と比べると、幼い様子が見受けられる。

(副校長) 先輩方の活動があって、今があるということを生徒たちに理解させたい。

(舎指導員長) 防災について…寄宿舎では、毎月、地震・火災・防犯といった訓練をしている。寄宿舎生たちの意識が変わってきて、自分たちが何をしなければいけないのかということを考えるようになった。継続が大事だと感じている。

(副校長) 寄宿舎生には、災害時に、役割を担って、自分にできることを実践できる人になってほしいと考えている。

(校長) 御意見をいただき、ありがとうございました。まだまだ課題はありますが、本校の取組を認めていただいたのは嬉しい。「今後も協力してやっていこう」というお気持ちが伝わってきたのは有難い。生徒たちの将来的な社会自立を目指し、それぞれの進路で輝けるようにするために、これからも御協力をよろしくお願いします。

2 コンプライアンス委員会 (10:40~11:10)

〔参加者〕・運営委員 5 人、本校教職員 12 人、手話通訳者

〔欠席者〕 2 人・・・PTA 副会長、情報教育担当教員

(1) 不祥事根絶の取組 (報告) 〔副校長〕

①体罰・いじめアンケート

保護者からの回答は「体罰・いじめは無し」であった。

②不祥事根絶の取り組み

各月のテーマについては、掲示板等で知らせ、意識向上を促した。残念ながら静岡県内で教員の不祥事が起きていることについては、その都度、綱紀粛正を呼び掛けた。また、職員会議の中で、それについて皆で話す機会を設けた。生徒指導に関する各学部のルールをまとめ、校内共通ルールを 1 学期に作った。生徒との関係については、スマートフォンでの個人的なやり取りはしない、また、生徒を個人的に自動車に乗せないなどのルールを徹底した。管理職の指示ではなく、教職員から「こ

うしていこう」と決めたもので、より効果があると考えている。「乗らない・乗せない・乗らせない」という合言葉を示した教員もいた。

(2) 後期教職員人権アンケート（報告）〔生徒指導課長〕

- ・ほとんどの項目で「できた」という回答。全員が確実にできたと言えるような関わりを意識していきたい。
- ・気になる点は、「名前の呼び捨て」について、「しないようにしている」と答えた教員が100%なのに対して、「している人を見たことがある」と答えた人が30%いたことである。自分自身はできていると思っても、実は、時々できていないこともあるのではないかと思われる。自分事ととらえて過ごしていくことが大切であると考え。
- ・本校生徒の自己肯定感が高くないということが課題になっているが、やればできるという気持ちを高めていくために、「教員自身も子どもたちの良いところを褒めている」、「やる気が出るような言葉掛けを心掛けている」といった項目について、「できている」という回答が100%だった。昨年度よりも数値が上がっている。子供たちのことを肯定的にとらえて、自己肯定感・自己有用感を高めていこうという教員の意識の表れであると推察される。

(3) 児童生徒いじめ体罰ハラスメントアンケート（報告）〔生徒指導課長〕

- ・「対友人、対教員」について少し気になる点が見られた。既に解決していた事例について回答した例もあるが、いずれにしても、問題点を把握したら、学校として学部全体いとして（管理職も含めて）対応している。現在も経過観察している事例もあるが、事後に大きな問題に発展したことはない。

(副校長) こちらは伝えたつもりでも、伝わっていないこともある。行き違いが起きやすいということも意識することが必要である。

(4) 相談について〔養護教諭〕

児童生徒いじめ体罰ハラスメントアンケートの中から読み取った内容や、今後、学校として取り組んでいきたいとについて。

- ・アンケートの結果で子供たちから出てきた問題については、学部の教員でしっかり対応してもらって、経過観察をしている状態。学部の教員以外でも、中庭で子供たちが遊んでいると、校長や養護教諭が廊下に出て、その様子を見ることもある。学校全体で子供たちを見ている。
- ・保健室にもいろいろ相談があるが、アンケートの最後の項目「相談できる人がいるか」について、「いない」と答えた子がいたのが気になった。カウンセラーと「相談をするとその問題が解決する」という体験をさせたいという話をいつもしている。一人で考えて悩んだ末に、SNSで自分が知らない人にすがってしまうようなことがあるので、自分の身近で相談ができるような体制を学校として継続し

ていきたい。

(5) コンプライアンス委員の皆様より

(委員5) コミュニケーションの仕方について。聴覚障害のある人を意識しているか。やり取りできちんと通じ合わないと、「失敗」と感じてしまい、教員に相談できないという気持ちになってしまう。1回言って通じたと思っても、それは無理がある。「この話し方で分かるのかな」と考えること、相手を尊重することが大切。初歩的な問題でこじれると、その後の対応が大変になってしまう。

(高等部主事) 新型コロナ感染予防でマスクをしているということで、口形が見えずに、聞こえていないけど「聞こえていない」と言えないという人が多いという報告を受けている。分からなかったら尋ねる、それでも伝わらなかったら、身振りを入れるなど工夫をすることが必要だと思う。

(委員4) コミュニケーションをいかにしてとるかが大事。相手の言っていることが理解できるようにしようと思っても、健聴者でも聞き違いは生じる。聴覚障害者についてはなおさらだと思う。何を言おうとしているのかが分かることが重要。教員も大変だと思うが、よろしく願いたい。

(委員3) 子供を呼び捨てにしないようにしているという点について、自分でできたと思う人が100%なのに、呼び捨てを見たことがあるという人が30%だったと聞いて、こういうことはあるなど、ドキッとした。自分としては意識しているつもりでも、実はそうではないこともある。私も自戒を込めてこれを読んだ。また、本校のように少人数で丁寧に指導している学校であっても、児童生徒は、教員に対して色々な思いを持っていることが資料から分かった。養護教諭の「相談する相手がない生徒がいることが心配だ」という話を聞いて、自分もそう思った。今後も個別に、丁寧に接して行ってほしい。

(委員2) 人を思いやったり信じたりできるようになるためには、信頼関係が小さい時からできていなければならない。そういう関係がないと、相談したい時に相談できないということになってしまうのではないか。

(委員1) アンケートにある「やる気になるような言葉掛け」については、教員が生徒にそういう言葉を掛けるだけでなく、教員同士も互いにそうした言葉を掛け合うことを心掛けると良い。教員同士も相談し合えるようにしたい。

(6) 情報セキュリティーについて (報告) [副校長が代理]

- ・今年度も情報漏洩は0件だった。
- ・ホームページが改善委員会によってリニューアルされ、見やすくなった。
- ・セキュリティーの諸問題や、ルールを守ることを意識しながらやってきた。

【委員 4 より御挨拶】（今年度で学校運営委員・コンプライアンス委員を退任）

平成 27 年から委員を務めてきました。第五地区東連合自治会副会長も今年度で退任します。長い間、ありがとうございました。聴覚特別支援学校は、いろいろな点で大変なこともあると思うが、これからもよろしくお願ひしたいと思います。

（校 長）児童生徒一人一人に寄り添って、気持ちを考えながら対応していくことや、しっかり伝わっているか確認するというところに気をつけてやっていきたいと、改めて思った。そういう気持ちを常に持ち続けたい。不祥事については、今年度も起きなかった。それを今後も継続していきたい。